

金融業の男性の予防を目的とした定期的な歯科受診状況について

吉野 浩一

Regular dental visitation for preventive maintenance in male financial workers

Koichi Yoshino

キーワード：男性、金融業、予防、歯科受診

要 旨

関東地方に在住する金融業の男性の者を対象にして、予防処置のための定期的な歯科受診状況を調査することを目的とした。25～64歳の950人を解析対象とした結果、年1回以上予防処置をうける者の割合は41.1%であった。永久歯の喪失経験、BMI、喫煙習慣、婚姻状況、年収および年齢調整後に年1回以上予防を目的として歯科医院を受診することに関連する要因は、昼食後の歯磨き有 (OR, 1.64 ; 95% CI, 1.20 - 2.25) 週1回以上の刷掃補助具の使用有 (OR, 3.20 ; 95% CI, 2.36 - 4.33)、治療が必要な歯がない (OR, 3.02 ; 95% CI, 1.98 - 0.50)、学歴 (大学院卒) (OR, 3.38 ; 95% CI, 1.30 - 8.79) であった。

緒 言

定期的に予防処置を受ける人の喪失歯数が少ないことが報告されている^{1, 2)}。歯の喪失予防として、メンテナンスの重要性が広く知られるようになり、定期的に歯科医院を受診する人が増加しているようである。わが国における20～60歳代の男女に対して2011年にWebで調査した安藤ら³⁾の報告によると、年に1回以上定期歯科受診して

いる割合は男性で31.5%、女性で39.9%であった。この定期歯科受診には検診の意味も含まれているため、本調査では純粹に予防処置を目的とした受診状況を調査することが目的である。これまでの報告により、歯科への受診状況は性別、職種や所得³⁻⁶⁾による影響を受けることが知られている。そこで、年齢を25～64歳とし、関東地方に在住する金融業の男性を対象として、具体的に利用状況を調査することを目的とした。

【著者連絡先】

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-9-18

東京歯科大学衛生学講座 客員准教授

吉野浩一

TEL : 03-6380-9272

E-mail : ko-yoshi@d8.dion.ne.jp

受付日 : 2017年11月10日 受理日 : 2017年12月5日

方 法

分析に用いたデータは、(株)インテージ社のモニタである。対象年齢は25歳から64歳までの金融業の男性とした。金融業とは、銀行、保険、証券会社とした。年齢群は、10歳毎の4群に分けた。インテージ社に登録しているモニタの内、本研究

に同意を得られた者に、インターネット上でアンケートに記入してもらった。それを2016年2月17日～19日の間に返信した各年齢層の約200名以上ずつを対象とした。その結果、有効なアンケートは950件であった。

アンケートの調査内容は、地域や年取等の基本属性、糖尿病や高血圧といった全身疾患の有無、BMI、3カ月平均の残業時間数、および職業性ストレスである。口腔内状況や口腔保健行動については、未処置歯の有無、歯磨き回数、昼食後の歯磨きの有無、歯磨き時間、歯間清掃道具の使用状況、かかりつけ歯科医院の有無、定期的な受診の有無、治療をしない理由等とした。統計的有意差の検定は、ANOVA、Cochran-Armitageトレンド解析、カイ二乗またはフィッシャーの直接法、および多重ロジステック解析を用いた。分析に用いたソフトは、SPSS Version 23.0, software (IBM Corp., Armonk, NY, USA) およびエクセル統計2012 Version1.11 (the add-in) であった。

本調査は東京歯科大学倫理委員会の承認を得ている (承認番号602)。

結果

表1に年齢群別に口腔保健行動を示した。日に2回以上歯を磨く者は75.6%であった。就寝前に歯を磨く者 ($p = 0.022$) およびフッ素入りの歯磨き粉を使用する者 ($p = 0.015$) の割合は、若い年齢群の方が高く、一方で週1回以上刷牙補助具を使う ($p = 0.002$)、かかりつけの歯科医有 ($p < 0.001$)、治療中と回答する者 ($p = 0.045$)、および1年以内に受診した者 ($p = 0.004$) は年齢が高い群の方が高かった。年1回以上予防処置をうける者の割合は41.1%であった。

予防を目的とした年1回以上の受診と各種要因とのクロス集計を表2に示した。1日の歯磨き回数、昼食後の歯磨きの有無、就寝前の歯磨きの有無、週1回以上の清掃補助具の使用の有無、治療が必要な穴が空いている歯の有無、喫煙習慣および学歴に関連が示された。

表3に永久歯の喪失経験、BMI、喫煙習慣、婚姻状況、年収および年齢調整後に「年1回以上予防を目的として歯科医院を受診する」と関連する要因を示した。関連を示した要因は、昼食後の歯

表1 年齢群別に見た口腔保健行動

	n	Total 950	年齢群								p値 ^a	p値 ^b
			25-34 94		35-44 238		45-54 391		55-64 227			
口腔保健行動	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
日に2回以上の歯磨き	718	75.6	69	73.4	184	77.3	296	75.7	169	74.4	0.852	0.374
昼食後の歯磨き	313	32.9	28	29.8	87	36.6	133	34.0	65	28.6	0.268	0.127
就寝前の歯磨き	784	82.5	80	85.1	209	87.8	311	79.5	184	81.1	0.050	0.022
フッ素入りの歯磨き粉を使用	359	37.8	37	39.4	99	41.6	153	39.1	70	30.8	0.088	0.015
週1回以上刷牙補助具を使う	370	38.9	27	28.7	81	34.0	163	41.7	99	43.6	0.020	0.002
かかりつけの歯科医有	595	62.6	42	44.7	143	60.1	247	63.2	163	71.8	<0.001	<0.001
治療中と回答する者	97	10.2	3	3.19	25	10.5	42	10.7	27	11.9	0.079	0.045
1年以内に受診した者	542	57.1	43	45.7	131	55.0	226	57.8	142	62.6	0.042	0.004
年に1回以上予防処置をうける	390	41.1	31	33.0	94	39.5	168	43.0	97	42.7	0.305	0.107

aカイ二乗検定またはFisher's exact testを用いた。bコクラン・アーミートトレンド検定を用いた。

表2 年1回以上予防を目的としての受診と各要因とのクロス集計 (n=950)

	n	年1回以上の受診		p値
		n	%	
1日の歯磨き回数				
1回以下	232	67	28.9	
2回	459	189	41.2	<0.001
3回以上	259	134	51.7	
昼食後の歯磨き				
無	637	230	36.1	<0.001
有	313	160	51.1	
就寝前の歯磨き				
無	166	43	25.9	<0.001
有	784	347	44.3	
週1回以上の刷掃補助具の使用				
無	580	172	29.7	<0.001
有	370	218	58.9	
永久歯の喪失経験				
無	519	218	42.0	0.551
有	431	172	39.9	
治療が必要な穴があいている歯がない				
違う	191	38	19.9	<0.001
そうだ	759	352	46.4	
糖尿病				
無	892	370	41.5	0.336
有	58	20	34.5	
高血圧				
無	741	297	40.1	0.265
有	209	93	44.5	
薬服用				
無	891	370	41.5	0.276
有	59	20	33.9	
BMI25以上				
無	655	277	42.3	0.255
有	295	113	38.3	
現在喫煙				
無	662	296	44.7	<0.001
有	288	94	32.6	
婚姻状況				
未婚	111	42	37.8	
既婚	817	344	42.1	0.058
別離、死別	22	4	18.2	
学歴				
高卒、短大、専門学校	139	45	32.4	
大卒	782	327	41.8	0.007
大学院	29	18	62.1	
年収				
600万未満	176	59	33.5	
600-800	179	76	42.5	0.264
800-1000	174	70	40.2	
1000-1200	160	70	43.8	
1200万以上	179	78	43.6	
年齢				
25-34	94	31	33.0	
35-44	238	94	39.5	0.305
45-54	391	168	43.0	
55-64	227	97	42.7	

磨き有 (OR, 1.64 ; 95% CI, 1.20 - 2.25)、週1回以上の刷掃補助具の使用有 (OR, 3.20 ; 95% CI, 2.36 - 4.33)、治療が必要な穴があいている歯がない (OR, 3.02 ; 95% CI, 1.98 - 4.59)、学歴 (大学院卒) (OR, 3.38 ; 95% CI, 1.30 - 8.79)であった。

考 察

本調査では年1回以上予防を目的として歯科医院を受診している者の割合が41.1%であった。安藤らによると20~60歳代の男性は1年に1回以上定期歯科受診している者の割合は31.5%であったことを報告している。これには必ずしも予防を目的としていない人も含まれているが、本調査の割合はそれよりも高い結果となっていた。歯科への予防を目的とした受診行動は、わが国では職種、性別、学歴、年齢、所得や歯科医院側での供給体制に影響を受けると報告されている³⁻⁷⁾。職種について安藤ら³⁾は、定期歯科受診の状況について、自営業、パート・アルバイト、学生などが事務系の会社員より男性において低い割合であると報告している。金融業に勤務する者は学歴や年収が比較的高いことが言われている。そのことが本調査結果の受診率の高さに結びついていると考えられる。

金融業の者の間では年収の差はみられない一方で、学歴として大学院卒の者の受診率が高かった。Murakamiら⁴⁾は、学歴は女性においてその差がみられ、大卒以上の学歴は高卒以下の者に比べ1.66倍受診が多いことを報告している。わが国においては学歴による影響の評価報告が少なく、今後調査が必要であろう。

本対象者では、「昼食後の歯磨き」、「週1回以上の刷掃補助具の使用」および「治療が必要な穴があいている歯がない」といった口腔清掃行動や口腔への関心が定期的な受診に結びついているようである。口腔への関心の高い人が受診し、さらに口腔清掃行動が高まり、頻繁に受診している結果として未処置歯が少ないのであろう。

厚生労働省は、歯周病を生活習慣病の一つとしている⁸⁾。生活習慣病の対策で重要なのは、発症予防と重症化予防である。歯科治療では、これまでう蝕や歯周病の治療、歯の欠損に伴う機能障害といった機能回復に力を注いできたが、重症化予防を目的とした治療後のメンテナンスの受診も増加している。う蝕や歯周病は、重症化予防がほぼ確立されており、今後は発症予防にシフトすべ

金融業の男性の予防を目的とした定期的な歯科受診状況について

表3 年1回以上予防を目的として歯科医院へ受診するを従属変数にしたロジスティック解析 (n=950)

独立変数	n	年1回以上予防を目的とした受診				
		n	%	OR*	95%CI	p値
昼食後の歯磨き	無	637	230	36.1	1	
	有	313	160	51.1	1.64	1.20-2.25 0.002
週1回以上の刷毛補助具の使用	無	580	172	29.7	1	
	有	370	218	58.9	3.20	2.36-4.33 <0.001
治療が必要な穴があいている歯がない	違う	191	38	19.9	1	
	そうだ	759	352	46.4	3.02	1.98-4.59 <0.001
学歴	高卒、短大、専門学校	139	45	32.4	1	
	大卒	782	327	41.8	1.37	0.84-2.24 0.203
	大学院	29	18	62.1	3.38	1.30-8.79 0.012

* 永久歯の喪失経験、BMI、喫煙習慣、婚姻状況、年収および年齢調整後の関連する要因を示した。

きである。

本調査では、金融業に勤務している人を対象に予防を目的としたメンテナンスの受療状況について調査したが、今後は発症予防を目的としたエビデンスの作成やシステムの構築を確立していく必要があると考える。

文 献

- 1) Axelsson P, Nyström B, Lindhe J. The long-term effect of a plaque control program on tooth mortality, caries and periodontal disease in adults. *J Clin Periodontol* 31 : 749-757, 2004.
- 2) Yoshino K, Ito K, Kuroda M, Sugihara N. Tooth loss in problem-oriented, irregular, and regular attenders at dental offices *The Bulletin of Tokyo Dental College* : 57 : 11-19, 2016.
- 3) 安藤雄一, 石田智洋, 深井穂博, 大山 篤 : Web調査による定期歯科受診の全国的概況, *口腔衛生会誌* 62 : 41-52, 2012.
- 4) Murakami K, Aida J, Ohkubo T, Hashimoto H:

Income-related inequalities in preventive and curative dental care use among working-age Japanese adults in urban areas: a cross-sectional study. *BMC oral health* 14 : 117, 2014.

- 5) Nishi M, Kumagai T, Whelton H: Access to personalised caries prevention (PCP) programmes determined by dentists: a cross-sectional study of current and potential PCP adopters in Japan and their knowledge of caries risk. *J Dent Hlth* 66 : 399-407, 2016.
- 6) 相田 潤, 深井穂博, 古田美智子, 佐藤遊洋, 他 : 歯科医院への定期検診はどのような人がうけているのか-受診の健康格差 : 8020推進財団「一般地域住民を対象とした歯・口腔の健康に関する調査研究」*口腔衛生会誌*67 : 270-275, 2017.
- 7) 深井穂博 わが国の成人集団における口腔保健の認知度および歯科医療の受容度に関する統計的解析. *口腔衛生学会雑誌*48 : 120-142, 1998.
- 8) 厚生労働省 : 国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針
www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002eyv5.html
2017年12月22日アクセス

Regular dental visitation for preventive maintenance in male financial workers

Koichi Yoshino

(Department of epidemiology and public health, Tokyo dental college)

Key Words : Male, Financial workers, Regular dental visitation, Preventive maintenance

Objective: It is well known that regular dental visitation is affected by age, region of residence, and job type. The aim of this study was to investigate regular dental visitation by male financial workers for preventive maintenance.

Methods: The participants were recruited by applying screening procedures to a pool of Japanese registrants in an online database. Participants filled out a questionnaire about their oral health behavior, job type, and income. Participants comprised a total of 950 male financial workers, ages 25 to 64, in the Kanto region of Japan.

Results: The percentage of participants who visit a dental office for preventive maintenance at least once a year was 41.1%. After adjusting for experience of tooth loss, BMI, smoking status, marital status, income, and age, a multiple logistic regression analysis found that participants without decayed teeth (OR, 3.02; 95% CI, 1.98–4.59) as well as those who brush after lunch (OR, 1.64; 95% CI, 1.20–2.25), use an interdental brush or floss (OR, 3.20; 95% CI, 2.36–4.33), or have a Master's degree (OR, 3.38; 95% CI, 1.30–8.79) were more likely to visit a dentist for preventive maintenance. Among male financial workers, annual personal income did not affect regular dental visitation.

Conclusion: These results indicate that educational background, oral health status, and oral hygiene behavior are associated with regular dental visitation for maintenance in male financial workers.

Health Science and Health Care 17 (2) : 97 – 101, 2017